

災害を防ぐには... 人間がもう少し過去の
記憶を忘れないように努力するより外
はないであろう。—— 寺田寅彦

山口県の大災害

—地震、台風・高潮、水害・土砂災害—

展示解説書

延宝4年地震

延宝4年(1676)6月2日に起こった、山口県内で知られる最古の地震。

「延宝見聞録」(No.1)には、この地震により美祢郡嘉満庄堅田村(現美祢市秋芳町)においては土地が馬屋ごと陥没し、また庄屋の内庭にも井戸程度の穴が開いたと記されている。その後も1日に5～6回、あるいは2～3回の余震が6月中旬まで続き、7月9日・12月14日にも地震があったと記される。

筆者である萩藩士野村勘兵衛就房はその感想を「萩初而七十余年ニ成侍レ共、今年ノ地震珍事也」(萩入部以来70年が経つが、今年の地震は珍しいことだ)と記していることから、毛利家萩入部以来はじめての地震であったことをうかがわせる。

津和野藩・福山藩の古文書にも地震に関する記述があり、中でも津和野藩では建物133軒が倒壊、城や川筋の石垣が崩壊するなど被害が大きかったことが知られる。

貞享2年地震

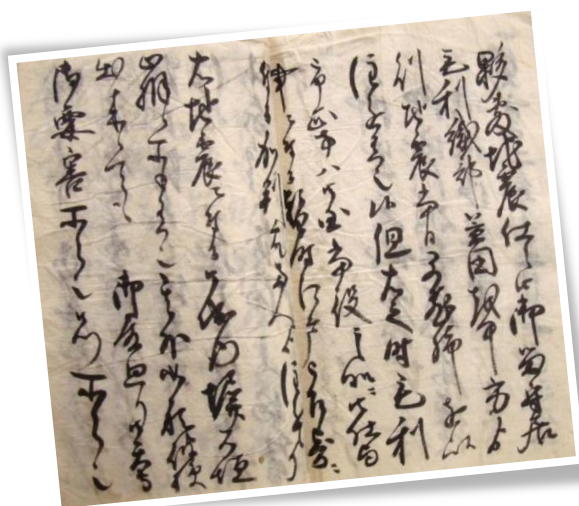
貞享2年(1685)12月10日に起こった地震。「公儀ヨリ被仰出御書附」(No.2)には、萩藩領内の被害状況が詳細に記されている。

萩では、城の石垣が破損し、城下町でも棚にあった器がごとごとく落ち、塀が倒れ、また家屋の柱が折れるなどの被害が出ている。中でも唐樋地区では「道の中をゆりわり、泥出」と記され、液状化現象も起こっている。

また大島郡外入村(現周防大島町外入)では、「山より石崩おち、けか仕候者大分有之」と、地震によって引き起こされた山崩れによって、多数の怪我人が出たことがわかる。

なお、「逸史」(徳山毛利家文庫 逸史30)には、徳山藩内でも屋敷の塀や墓石が倒れるなどの被害があったことが記されている。

なお、広島藩、福山藩、岡山藩、津山藩、宇和島藩、土佐藩などの古文書にも記述があり、中国・四国地方全域が広く揺れた地震であったことがわかる。

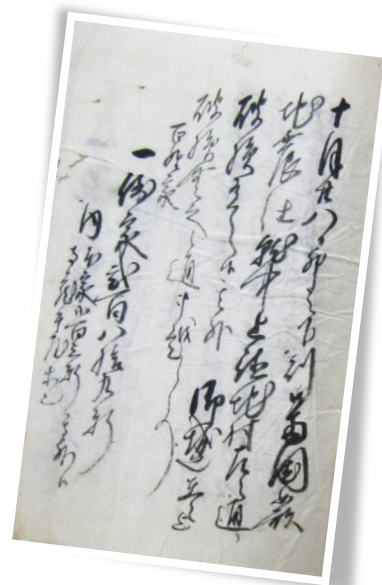


No.2 公儀ヨリ被仰出御書附

宝永4年地震

宝永4年(1707)10月4日午後2時頃に起こった、遠州灘沖から四国沖までの広い範囲(南海トラフ)を震源域とした巨大地震。南海トラフの地震は100～150年に一度程度、繰り返し発生する巨大地震の典型例であるが、史料からある程度地震像がわかる5地震(明応・慶長・宝永・安政・昭和)の中でも最大規模であるとされる(北原糸子他編『日本歴史災害事典』2012)。またこの地震のおよそ1ヶ月半後(11月23日)に富士山が噴火したことで知られている。

「公儀事諸控」(No.3)によると、萩藩では10月4日の地震では特に被害はなかったが、24日後の10月28日に上徳地村(現山口市徳地)で地震が起こり、建物289軒が倒壊、死者3人などの被害が出ている。また「逸史」(No.4)によると徳山においては10月4日の揺れと高潮(津波)被害は上方と比べそれぞれ「百歩一可為候」(100分の1程度)、「可為十歩一」(10分の1程度)と記されるなど、被害は比較的少なかったようである。なお、28日の地震では、練壁が落ちる被害が確認できる。



No.3 公儀事諸控

安政大地震

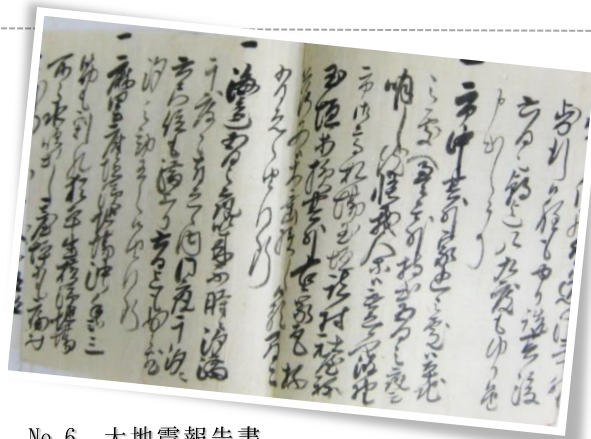
嘉永7年(1854)11月4日午前10時頃、駿河湾・遠州灘・熊野灘の海底を震源域として推定M8.4の巨大地震が起こり、約30時間後の11月5日夕方4時頃にも、紀伊水道～四国沖の海底を震源域とする同規模の巨大地震が起こった。この年は天災が相次いだため、この地震を契機として11月27日に「安政」と改元された。今回の展示では、二つの地震を併せて「安政大地震」と呼ぶ。「美々婦久路」(No.5)には、近畿以西の状況を報じた瓦版が綴じ込まれている。

県内でも多くの被害が確認できる。「大地震報告書」(No.6)は、地震発生後の11月6日から11日まで、各代官所から藩へ提出された状況報告書の綴である。この記録によると、萩藩領内では11月4日に小さな地震が起こり、5日に大きな地震に襲われ、その後も余震が続いていることがわかる。特に5日の地震により、都濃郡末武下村(現下松市末武下)では高札場の玉垣が崩れ、米蔵の壁に割れ目が入り、花岡八幡宮(現下松市末武上)の石灯籠四基が倒れる被害が出ている。また台道村(現防府市大道)・名田島村(現山口市名田島)では干拓地の土手が割れ、さらに平生村(現平生町)・中野開作(現宇部市中野開作)などの瀬戸内海沿岸で液状化現象が起こっている。

また、熊毛郡室積村(現光市室積)では家屋が数軒倒壊し、上関代官からは5日夜に干潮時にもかかわらず「六尺位も満上り」と、180cmほどの津波が報告されている。

なお、嘉万村(現美祢市秋芳町)の弁天池では、地震後に湧水が濁り、水位が下がったことが報告されている。

萩城下でも被害があり、「密局日乗」(No.7)や「御三霊様御事蹟編集掛日記」(毛利家文庫19



No.6 大地震報告書



No.7 密局日乗

日記32)には、米屋町の町屋一軒が大きく西に傾き、清光寺の本門の片柱が30cm程度地中に沈んだと記される。

また「御蔵本日記」(徳山毛利家文庫1078)には、都濃郡東豊井村(現下松市東豊井)妙法寺で、地震により台所の屋根が釜場に落ちて火事が起こったことが記される。

明治5年地震

明治5年(1872)2月6日の夕方に発生した島根県浜田町沖を震源とするM7.0～7.2の地震で「浜田地震」と呼ばれる。

島根県を中心とする日本海沿岸地帯で死傷者は1,100人以上に上り、家屋の全半壊は焼失も含め1万件弱に及んだ(北原糸子他編『日本歴史災害事典』2012)。

山口県においても「馬関支庁記録」(No.8)に、豊浦郡横野村(現下関市横野町)の横野八幡宮の鳥居が倒壊し、同郡彦島八幡宮の笠石が落ち、さらに同郡武久村(現下関市武久町)善福寺の門が大破するなどの被害が記録されている。また、山口県初代県令中野梧一の日記に、湯田温泉でランプが壊れ、瓦が落ちたことが記され、また道場門前の商家安部家の「年中日誌」(安倍家243)にも、瓦が落ちる被害が記されるなど、現在の山口市内でもかなりの揺れが確認できる。また、当時、萩にいた旧萩藩士内藤万里助(つとむ)の日記「内藤万里助後造酒公私日乗」(毛利家文庫71藩臣日記17(9の8))からは、諸所にて被害があり、また16日まで余震が続いていたことがわかる。

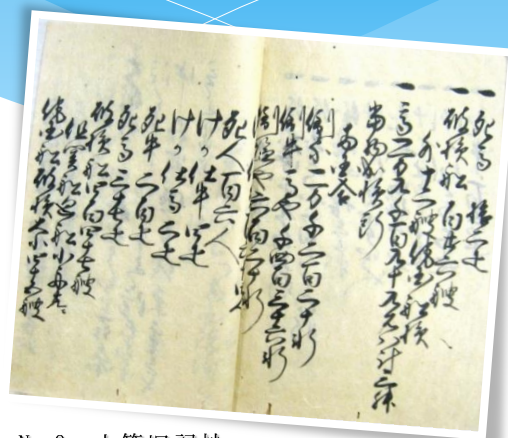


No.8 馬関支庁記録

承応2年台風

承応2年(1653)8月5日夜(新暦9月26日)に防長両国を襲った台風。

「小箱旧記抄」(No.9)には、この台風による防長両国内の被害状況報告が含まれている。この記録から、台風により高潮が引き起こされ、死者106名、倒家11,220軒、死牛200匹など甚大な被害が出ていることがわかる。また、「無盡集」(No.10)には支藩領域の被害内訳も記される。「公儀所日乗」(毛利家文庫19日記4(36の34))には、隣国の安芸国においても8月6日に死者326名、広島城周りの橋が全て落橋するなど、甚大な被害があったことが記される。



No.9 小箱旧記抄

文政11年台風

文政11年(1828)8月9日(新暦9月17日)に北部九州～防長両国を襲った台風。

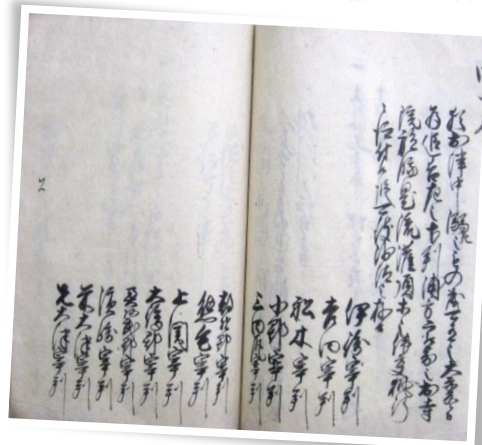
この台風は、オランダ商館付医師シーボルトが帰国する際に乗船予定であった船を座礁させ、この後にシーボルト事件が発覚したことから、別名「シーボルト台風」「子年の大風」とも呼ばれる。その被害状況から、佐賀藩のみで死者が1万人を超えるなど、過去300年間で最強の台風であったとされる。

防長両国においても多大な被害があり、「公儀エ出ル御書附」(No.11)から、萩藩において、倒壊・流失家屋が10,933軒、104名の死者、348箇所(土砂災害)が発生していることがわかる。また「草舎年表」(No.12)には、一ノ坂より南側で被害が大きく、山口宰判で500軒余、小郡宰判で1,500軒余の家屋が被害を受け、山口では怪我人が20人程出て、即死者もあったと記されている。中でも下関では「別て海端家高塩(潮)にて痛家夥敷、懸り船不残損ス」と高潮により被害が大きかったと記される。

この他にも「諸事小々之控」(No.13)には、8月21～23日にかけて萩の春日神社において二夜三日の風鎮五穀成就の祈祷が行われ、また沿岸部の宰判では、多くの溺死人を追善するために施餓鬼供養などの仏事が行われたと記される。また、清末藩から萩藩に対し開作地の復旧のために、人夫1万人の助力を求める要請があったことがわかる。



No.11 公儀エ出ル御書附



No.13 諸事小々之控

6月9日の歴史小話(13:30～)でも紹介します！

昭和17年周防灘台風

昭和17年(1942)8月27～28日に九州～近畿地方に被害をもたらした台風。死者・行方不明者数1,158人の内、山口県のみで794名を数えるなど、県内の被害が突出して大きかった。

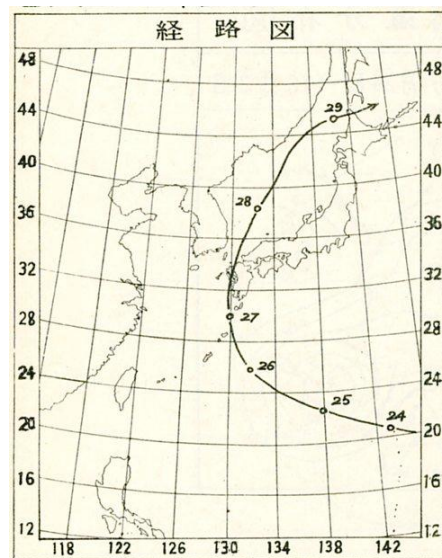
中心気圧は933hPa前後とされる。「災害雑件」(No.14)には、災害発生直後から昭和20年5月までの復興に関わる文書が綴じ込まれており、その中の「災害被害状況調」には「二十時ニ於テハ實ニ三四米ニノ最高風速ヲ示シ」と、夜8時に34.2mの風速が記録されたことを伝えている。被害が拡大した理由として、台風通過時が大潮の満潮時と重なり、南寄りの烈風により高潮が発生したことがあげられる。「風水害状況」(No.15)に綴じ込まれている「颱風被害状況速報」(山口県

水産課作成)によると、「午後七時頃ニ至リ風波猛烈ヲ極メ刻々勢ヲ増シ、午後九時半乃至十時頃満潮ニ至リ随所ニ堤防護岸ヲ破壊シ海水ハ怒濤ノ如ク内海一帯ノ漁村ニ浸入セルモノノ如シ」と、猛烈な高潮の状況を伝えている。

「災害一件」(No.16)は、県総務部庶務課作成の周防灘台風に係る一件書類、また「風水害一件」(No.17)は、復興本部にて編綴された文書であり、被害状況や復旧状況を刻々と伝える書類が綴じ込まれている。

「災害一件綴」(No.18)は、大道村(現防府市大道)の役場文書であり、この台風被害に村役場がどのように対応したのかわかる。

中央気象台はこの台風被害について、昭和19年(1944)9月に『秘密気象報告』第6巻をまとめている。その序文において「其用語等の制限上徹底を缺いた憾みもあり遂に山口・広島両県下で警報不徹底による被害を生じた」と述べられているとおり、戦時下において気象報道が規制されたため、被害が拡大したとされる。

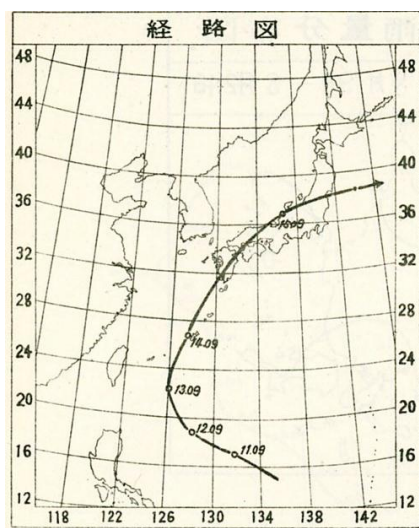


(『山口県災異誌』より)



伊藤家文書写真ほか

ルース台風



(『山口県災異誌』より)

昭和26年(1951)10月14～15日に九州・中国地方を襲った台風。

太平洋戦争後は気象業務が米軍の管理下に入ったため、「ルース (Ruth)」という台風名も、米軍気象観測センターによるもの。なお、サンフランシスコ平和条約発効後は気象庁が名前を付けることになり、現在に至っている。

この台風は14日夕刻に鹿児島県西部に上陸し、14日夜半に山口県中部を横断し、15日早朝に山陰を抜け北陸沖に去った。山口県下では最大風速35m、県東部では13日～14日の総雨量が480mmに及び、1時間あたりの雨量が100mmに達する豪雨がかった(『山口県災異誌』)。

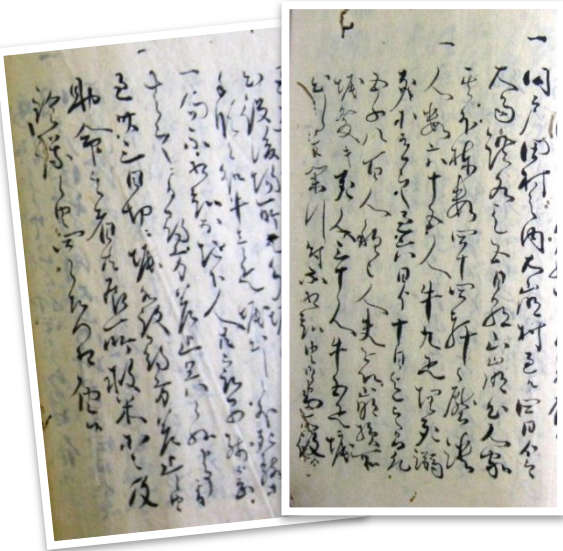
県下で特に被害を被ったのは錦川流域で、山崩れや出水が頻発した。北河内村(現岩国市)では、土砂崩れのために1集落がほぼ壊滅状態となり、この台風における県下の死者・行方不明者は405人にのぼった。この台風では、田中龍夫知事の出

動要請を受け、吉田茂首相の決裁という形で警察予備隊(自衛隊の前身)福岡第4管区隊の災害出動が初めて行われた。「昭和26年ルース台風被害実況写真」(No.25)は県による記録写真、「ルース台風 大被害の実況」(No.27)は、この台風による被災及び救援活動の様子を報じた貴重なニュース映像である。



No.25 昭和26年ルース台風被害実況写真

戸田の大つえ



No. 19 御当職所日記

天保2年(1831)6月5日(新暦7月13日)に大島郡戸田村(現周防大島町戸田)を襲った土砂災害。

「御当職所日記」(No.19)には、6月10日に当職所(萩藩の民政を統括している部署)へ第一報がもたらされ、同27日に災害及び救助状況が報告されている。この日記によると、4日からの大雨により5日朝に山が崩落し、44軒が押し潰され、65名と牛9匹が生き埋めとなったことがわかる。このため大島宰判では、6日から10日まで5,800名もの人夫が救出活動にあたったが、30名・牛5匹の死体を発見するにとどまった。その後、大島代官であった山縣四郎左衛門が陣頭指揮を執ったものの、牛1匹の死骸を発見するのみで、結局23日に「最早残念無之ニ付尋方差止呉候」(もはや思い残すことは無いので、搜索を止めて欲しい)という地元民の希望を受け、搜索を打ち切っている。

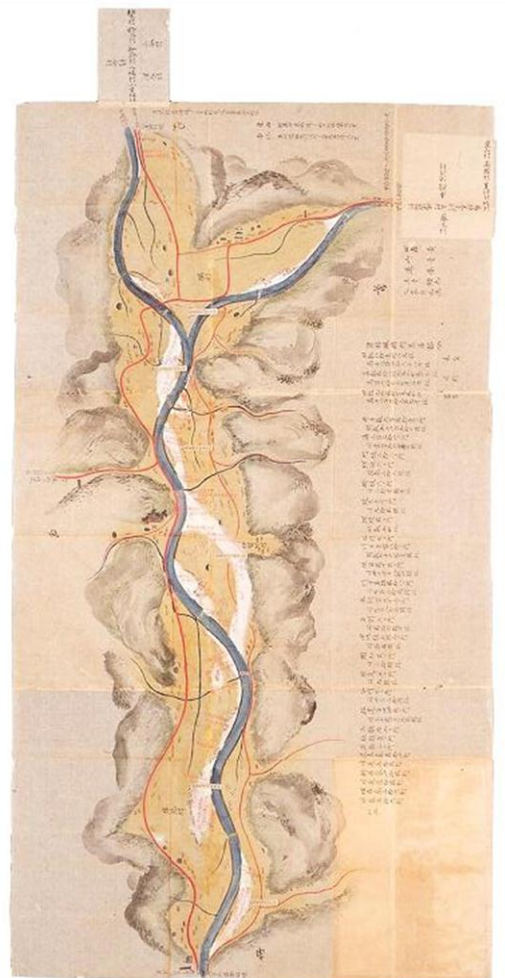
「大島宰判本控」(No.20)からは、この土砂災害により7町6反1畝14歩の田畑が埋没し、この復旧に延べ12,900人余の労力が必要と推計していることがわかる。

天保11年の水災

天保11年(1840)6月4～5日(新暦7月2～3日)に県内を襲った豪雨災害。天保7年、同8年にも水害が、さらに天保9年(1838)には飢饉が発生するなど災害が相次ぐ中、さらに追い打ちをかけるようにこの水害が発生した。

「御当職所日記」(No.22)には、この災害の際、当職所へ伝えられた領内各地の被害情報が記されている。これによると、特に佐波川沿いの徳地・三田尻宰判、樫野川沿いの山口・小郡宰判の被害が大きかったことがわかる。山口宰判では高嶺(現山口市)で土砂崩れが発生し、また御茶屋橋などが流れ落ちる甚大な被害があった。小郡宰判でも「小郡往還筋道溝共ニ一様之湛水」で夜中の通行が困難となり、下郷柳井田川の土手が決壊した辺は人家が流失し、床上3～5尺(90～150cm)程度の浸水があったと記される。佐波川沿いではさらに被害が大きく、6月9日条に佐波川土手が決壊し「三田尻御開作迄一面之洪水」と記され、佐波川上流の岸見村では、6月5日に幼子を背負った母が土砂崩れにより命を落とすという惨事も起こった。さらに「浦日記」(毛利家文庫71藩臣日記2(62の10))には、三田尻宰判の佐波川河口では4～5日も水が引かず、船で往来していると記される。

「山口宰判諸村水損所凡絵図」(No.21)、「徳地宰判堀・伊賀地・岸見三ヶ村川筋水損図」(No.26)は、ともにこの災害で作成された水損図である。この他にも三田尻宰判、小郡宰判、岐波村、台道村の水損図が現存する。これらの絵図から各地における土手根切(堤防決壊)の箇所、またそれに伴う水湛(冠水)範囲なども判明する。なお、この水損図から、佐波川河口の西ノ浦では浸水地域の水深が1丈6尺(約4.8m)にも及んだことがわかる。



No. 26 徳地宰判堀・伊賀地・岸見三ヶ村川筋水損図

郷坪大水害

明治19年(1886)9月24日に大島郡東屋代村(現周防大島町屋代)で発生した土砂災害。

9月20日頃から毎日豪雨が降り続き、屋代川支流久保川の上流部に形成された天然ダムが24日夕刻に決壊、土石流が発生し、60棟の家屋が流され、110人が死亡した。被災地の
大野政一から土居村副戸長宛てに出された「大野政一書状」(No.23)は、「郷之坪ノ如キハ一村拳而蕩尽セリ」「慈母ヲ失ヒ愛児ヲ遺ツル等其慘状名状スヘカラス」と、この災害の悲惨さを伝えている。明治22年(1889)3月には災害を風化させないために、大島郡長が中心となり「罹災之碑」が建てられている。

またこの災害の一ヶ月前の8月末にも県内を豪雨が襲っており、明治19年(1886)9月8日付け防長新聞では、玖珂郡長谷村で倒家25軒、死者9名、田畑宅地の6割が破損したと伝えている。「罹災窮民救助」(No.24)の黒沢村外拾ヶ村戸長であった長峯公の進退伺には、給与金(被災者に対する給付金)が下付されないならば「原野ニ餓死スルハ必然」と述べられるなど、緊迫した状況がうかがえる。

県は新聞広告で大島郡と玖珂郡に対する義捐金を募った。この結果、総額136円50銭が集まり、二郡へ贈られている。



罹災之碑

昭和26年佐波川水害



防府市和字にある佐波川大洪水碑

近代に入っても佐波川はたびたび水害に見舞われた。大正7年(1918)7月11日の水害では新橋が流失、堤防各所が決壊して田畑・家屋が浸水するなど甚大な被害をもたらした。

さらに戦後、昭和26年(1951)7月8日から降り始めた雨は、9日から10日にかけて勢いを増し、佐波川の氾濫を引き起こし、沿岸諸村に甚大な被害をもたらした。

同年7月20日現在の被害状況をまとめた「豪雨による被害状況」(No.28)によると、当時の雨量は出雲村堀(現山口市徳地堀)において24時間で300mmを超え、死者は28名に及んでいる。

「昭和26年大水害の実況」(No.29)は、この水害による被災状況及び救援活動の様子を報じた貴重なニュース映像である。

この災害により佐波川流域における治水への関心が高まり、昭和27年度から佐波川防災ダム工事が着工された。この工事は昭和28年度に、かんがい用水の補給及び防府市一円の工業用水・電力確保を目的とする「佐波川総合開発事業」として、多目的ダム建設へと計画を変更し竣工した。「佐波川ダム概要」(No.30)はダム紹介のリーフレットであり、「昭和26年7月9、10日の異状出水に遭遇し」「本川上流に防災ダムを築造する」こととなったと、その経緯を記している。



No.31 昭和26年7月大水害の実況写真

出品目録

catalog of exhibits

I …6/1～7 II …6/8～9 III…6/11～30 ※IIIは資料小展示として展示。なお月曜休館。

地震				I	II	III
延宝4年地震	1	延宝見聞録（写）	県史編纂所史料104	○	○	
貞享2年地震	2	公儀ヨリ被仰出御書附 一	毛利家文庫41公儀事34（2の1）		○	
宝永4年地震	3	公儀事諸控	毛利家文庫41公儀事5（8の4）	○	○	
	4	逸史	徳山毛利家文庫 逸史49		○	
安政大地震	5	美々婦久路	毛利家文庫29風説41		○	
	6	大地震報告書	毛利家文庫9諸省617	○	○	
	7	密局日乗 百廿三	毛利家文庫19日記18（129の124）		○	
明治5年地震	8	馬関支庁記録	県庁戦前A総務74			○
台風・高潮				I	II	III
承応2年台風	9	小箱旧記抄 二	毛利家文庫9諸省14（4の2）	○	○	
	10	無盡集 巻三 御国中	毛利家文庫16叢書40(89の13)		○	
文政11年台風	11	公儀エ出ル御書附	毛利家文庫41公儀事27(12の8)		○	
	12	草舎年表	毛利家文庫17年表37(15の7)	○	○	
	13	諸事小々之控	毛利家文庫31小々控20（37の34）		○	
昭和17年周防灘台風	14	災害雑件	戦前戦後土木部496		○	
	15	風水害状況	県庁戦前A土木追加55		○	
	16	災害一件	県庁戦前A警察44		○	○
	17	風水害一件	県庁戦前A土木追加57, 58		○	
	18	災害一件綴	内田家文書2497		○	
ルース台風	25	昭和26年ルース台風被害実況写真	災害写真2		○	
	32	県政だより 11月 No. 26	ポスター昭和26-10		○	
	27	ルース台風 大被害の実況	ムービーフィルム801		○	
水害・土砂災害				I	II	III
戸田の大つえ	19	御当職所日記 百四	毛利家文庫19日記22(178の104)		○	○
	20	大島宰判本控(写)	両公伝史料264		○	
天保11年の水災	21	山口宰判諸村水損所凡絵図	毛利家文庫58絵図325		○	
	22	御当職所日記 百廿七	毛利家文庫19日記22（178の127）		○	
	26	徳地宰判堀・伊賀地・岸見三ヶ村川筋水損図	毛利家文庫58絵図307		○	
郷坪大水害	23	大野政一書状	武田家文書522	○	○	
	24	罹災窮民救助	県庁戦前A総務1543		○	
佐波川水害	28	豪雨による被害状況	冊子50各団40	○	○	
	29	昭和26年7月大水害の実況	ムービーフィルム803		○	
	30	佐波川ダム概要	リーフレット昭和37-21		○	
	31	昭和26年7月大水害の実況写真	災害写真1		○	

※展示資料は変更する場合があります。

◎当館専門研究員が下記の日程で「ギャラリートーク」を開催します（参加無料）。

6月8日【土】①10:30～11:00 ②16:00～16:30 / 6月9日【日】①10:30～11:00 ②15:00～15:30